

平成22年9月10日

第709号

(P6~8)

山形県医師会会報

別刷

外科学と芸術の心

山形大学医学部外科学第一講座(消化器・乳腺甲状腺・一般外科) 主任教授
山形大学医学部附属病院 副院長

木 村 理

都市地区医師会コーナー

外科学と芸術の心

山形大学医学部外科学第一講座（消化器・乳腺甲状腺・一般外科）主任教授

山形大学医学部附属病院 副院長 木村 理

真の発見の旅は、新たな風景を探すことではなく、新たな視点を獲得することにある

— マルセル・ブルスト —

1. 石川啄木と母と私

外科医になって一心不乱に毎日の手術や術後管理、学会発表や論文発表に追われ、石川啄木を思い出すことはほとんどありませんでした。しかし約12年前に山形に赴任し、冬の雪の深さなど、初めて住んだ東北の生活の厳しさを体験し、啄木の歌を思い出すようになりました。

大正と昭和の境あたりで生まれた母は文学少女で、短歌に興味を持っていたのですが、私が小学生の頃、「女学生のときにもものすごく感動した歌人がいたんだ」といって、石川啄木の歌をたびたび教えてくれました。このことが、啄木に関する強い記憶として残っております。

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽ろきに泣きて
三歩あゆまず

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢっと手を見る

などです。

子供心にもわかりやすく、こころに響くものがありました。

山形に赴任して数年たち、盛岡で外科の全国学会があったときだったでしょうか、啄木の生家を訪れてみました。なにより、母の形見として母が晩年に作った歌のコピーをいつも身につけていたということもその動機であったかもしれません。

啄木の生家では、昔の小学校の校舎やいろいろな本とも出会いました。また啄木の歌集の復刻版も購入しました。何よりよかったのは北上川の岸边に立ってその柳に触れて歩くことができたことです。そして「ふるさとの山」である岩手山や姫神山もみることができました。国際啄木学会の存在を知ったのもこのときだったかもしれません。

このあたりでたまたま出会った老齢の女性から昔の啄木の生の話を聞きました。「山に向ひて言うことなし」と歌った「ふるさと」には啄木は二度と帰ることがなかったということでした。それでも啄木はふるさとへの思いをつねに歌い続けたのです。「ふるさとの訛りなつかし停車場」である上野駅に「そを聴きに」いったのもふるさとへの強烈な思いからなのはよくわかります。

渋民小学校の校庭で子供たちが遊ぶ声をききながら、北上川に向かって歩いていくと啄木の歌碑があります。

やはらかに柳あをめる
 北上の岸辺目にみゆ
 泣けとごとくに

ここでも強烈なふるさとへの思いを聞くことができます。

啄木の歌の、人を感動させるからくりの一部を少し分析してみます。この歌は、最後の7文字がそれまでの内容の「落ち」として表現されているように思えます。「落ち」というのはちょっと表現が適切でないかもしれませんが、落語の「落ち」4コマ漫画の「落ち」、あるいは推理小説の「種明かし」というような意味です。つまりそれまでたんたんと状況を述べておいて最後の句で全体をカバーするように強烈な、思いもつかないような驚きの言葉、文言で「落としている」のです。「泣けとごとくに」というのは常人では思いつかない、ものすごい激情の言葉です。

そしてこの「落ち」の方式は前述の歌の「ぢっと手を見る」も同様とされます。つまり「はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざり」というのはある状況を普通の人々が普通に読んだ表現だと思います。あるいは普通の人々が普通に表現できる状況です。ここで「ぢっと手を見る」としたのは天才啄木ならではの表現なのです。これは啄木以外にはお呼びもつかない表現なのです。

多くの、人を感動させる、わかりやすい、かすかすの歌のなかでとられたこの一つの方式は、庶民に感動を与える、感動を与えやすい一つの方策、方式、「歌式」なのではないかと思えます。

最後に母の形見の歌を紹介させていただきます。母は約30年前に研修医として勤務していた我が母校の附属病院で上司である教授に手術していただき、私自身が受け持ちになりました。

笑顔消して点滴針を子にさしぬ
 (針を刺させた、の意味)
^{しずく}滴はぬくみとなりて沁みゆく

やりがいはあるといたり^{おきなお}幼顔
 残している子は研修医として

(木村美代)

2. 室内合奏団顧問就任の挨拶

さて私の人生は、音楽との関係をきることができません。小学校ではオルガン教室に通い、中学ではギターで「アルハンブラの思い出」をつま弾き、高校の選択授業は音楽で名物教師に習い、大学ではギターを片手に女子大との合ハイ（合同ハイキング）で高尾山に登り、ホークソングを歌ったりと、楽しい思い出が詰まっています。

昨年（2009年）、縁あって山形大学医学部室内合奏団の顧問に就任したときには、次の文章でご挨拶させていただきました。

室内合奏団のみなさまへ ー顧問就任のご挨拶ー

アインシュタインとモーツァルトはどちらがより天才か、という議論がある。それはモーツァルトだろう、という意見がある。アインシュタインがいなくても相対性理論は他のだれかが発見したかもしれないが、モーツァルトの旋律はモーツァルトがいなかったらこの世に生まれてこなかっただろう、ということがその根拠になっている。

私のドイツ留学時代のVater ProfessorはMoessner（メスナー）教授である。研究を指導してくれる教授をドイツではVater Professor（父なる教授）という。昨年（2008年）5月に山形で主催させていただいた日本肝胆膵外科学会では御来形いただき、特別講演をお願いした。ロマンティッ

ク街道の出発点であるWuerzburg（ヴュルツブルク）大学で2年間一緒に研究させていただいたが、その間の1990年にMoessner教授がドイツ膵臓学会を主催されたことがあった。近くの町のSommerhausen（ゾマーハウゼン）というところで全員懇親会を行い、そのときの出し物がモーツアルトの弦楽四重奏であった。その「なま」で聞く音のすばらしさ、目の前で演じられる楽器の演奏に心を打たれた。いつか私もモーツアルトを私自身が主催する学会で演奏してもらいたい……。その夢は18年後に実現した。山形県民の誇りである文翔館で、日本肝胆膵外科学会の理事会終了後にやはり県民の誇りである山形交響楽団の方々に演奏していただいた。Moessner教授も私の隣で聞きいていた。

山形大学医学部室内合奏団はこのように音楽環境に恵まれたなかで、日々の活動を謳歌されている。5年前にもなろうか、日本腹部画像診断研究会の懇親会で演奏をお願いしたことがある。そのにぎやかで若さあふれる演奏には全国から集まっ

た多くの消化器外科医、消化器内科医、放射線科医、病理医たちが感動した。おかげさまで研究会は大成功のもとに終わった。

室内合奏団のみなさまおよびその先輩たちにはこの場を借りてそのときのお礼を申し上げますとともに、本年4月からこのすばらしい合奏団の顧問となった「縁」に感謝します。突然自分の子供が60人も増えたような驚きを大切にしながら、団員たちの、例えばハートフルコンサートで病院の患者さんたちを感動させる音楽を演奏する日々の努力の継続を願って、顧問としてのご挨拶に変えたいと思います。

なお、アインシュタインは「死ぬとはどういうことか」と聞かれて「モーツアルトが聞けなくなることか」と答えたということです。

（以上室内合奏団就任挨拶）

これからも、芸術の心を忘れることのない外科医として、豊かな人生を行きていきたいと思いません。

とがで
、中学
つま弾
い、大
合同ハ
を歌っ

部室内
章でご

挨拶ー

らがよ
ツアル
タイン
見した
ーツァ
かった
る。

ssorは
指導し
（父な
形で主
は御来
ティッ